

柔道の山下泰裕さんが2月下旬、ワシントンを訪れた際、「ワシントン日本語継承センター」に招かれた。小講堂のマットでまず同行した東海大学柔道部出身の一流選手3人が実技を披露した。鋭い投げ技を受け手の体が宙に舞う。ぎっしりと床に座った50人ほどの子供たちがそのたびに、「おっ」とどよめく。

この日本語学校は日本に必ず帰る駐在員たちの子弟用とは異なり、米国定住の日本人や両親の一方が日本人の子供たちが主対象である。山下さんはそんな生徒たちに「柔道の心」にからめて「日本の礼節や思いやり」を平易な日本語で語った。「オリンピックで優勝し、君が代を聞き、日の丸をみたときが一番うれしかった」という結びの講演だった。そして質問を求めると、いかにも米国らしく数本の手がすぐ上がった。

「柔道は合気道や剣道とはどう



あめりかノート

ワシントン駐在編集特別委員 古森義久

導うんですか」

指さされた少女がよみみのない日本語で問うた。ポニーテールの金髪、外見に「日本」の形跡はいささかもない子だった。山下さんもびっくりしたらしく、「ウーン、いい質問ですね」と数瞬、詰まっていたから答え始めた。日本とはまったく無縁にみえる平均ふう米国人少女がなぜ完璧な日本語を話すのか。あとで本人に尋ねてみた。

「あたしは東京の杉並区立馬橋小学校に4年まで通っていました」

ミケラ・プリンスリーさん、10歳だという。8歳の妹サラさんがそばにいて、同様に自然な日本語を話した。機会を改め、姉妹の一家から話を聞くと、このユニークな現象の由来が判明した。

姉妹の父ジョンさんは昨年秋まで約5年、経済メディアアのブルームバーグ社東京支局の次長兼記者だった。以前にも合計6年、英語教師や特派員として滞日し、日本語を学び、合気道に励んだ体験から子供たちには日本の教育を望んだ。妻のカタランさんも「子供たちが日本に何年も住みながら日本の教育を受けないのはもったいな

いと考えた」という。その結果、娘たちは阿佐ヶ谷幼稚園から馬橋小学校に通い、アメリカンスクールとは無縁に終わった。

ジョンさんは「私が好きになった日本の文化や社会のすぐれた面を子供たちにも学んでほしかった」という。日本はこの米人一家にはそれほどの魅力を発揮し、しかも失望させなかったということ

だろう。ジョンさんにすれば、「わが内なる日本」のまさに継承だともいえる。

「継承センター」も自らの日本へのアイデンティティを日本語の教育で子供に受け継がせようという日本人が主体で開設された。椿谷茂校長とともに5年前に発起人となった越谷直弘、恵子夫妻は「将来、日本国民にはならないだろう子供たちにも日本語を継承させるために、まず楽しい教育に努めることが方針」と語る。とはいえ、「日本の継承」は「日本の国際化」に比べ、まずハイライトを浴びない。

だが山下さんらが「継承センター」を去るとき、生徒たちがざっと起立して、代表が「ではわたしたちからのプレゼントです」と述べた。そしてみんなが君が代を斉唱した。ミケラさん姉妹も山下さんもいっしょに歌っていた。日本の継承にも希望があるな、とふっと感じた。

「日本の継承」にも希望